



研究論文 (Articles)

子ども用自己効力感尺度の開発および 信頼性と妥当性の検討¹⁾

岸田 広平^{*1, *2}・松原 耕平^{*2, *3}・立川 彩優^{*4}・
中西 陽^{*5}・石川 信一^{*2, *4}

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科^{*1}, 青少年のための心理療法研究所^{*2},
同志社大学 リサーチ・イノベーション推進機構^{*3}, 同志社大学 心理学部^{*4}, 近畿大学 総合社会学部^{*5})

Development of the Children's Self-Efficacy Questionnaire and examination of its reliability and validity

KISHIDA Kohei^{*1, *2}, MATSUBARA Kohei^{*2, *3}, TACHIKAWA Ayu^{*4},
NAKANISHI Yo^{*5} and ISHIKAWA Shin-ichi^{*2, *4}

(Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University^{*1},
Japan Institute for Child and Adolescent Psychotherapy^{*2},
Organization for Research Innovation, Doshisha University^{*3},

Faculty of Psychology, Doshisha University^{*4}, Faculty of Applied Sociology, Kindai University^{*5})

This study aimed to develop the Children's Self-Efficacy Questionnaire (CSEQ) as a scale to measure general self-efficacy in children and adolescents and to examine its reliability and validity. Additionally, it sought to investigate the cross-sectional relationship between self-efficacy, anxiety and depressive symptoms. A total of 1,059 participants, ranging from fourth-grade elementary school students to first-year high school students, were included in this study. Exploratory and confirmatory factor analyses revealed a one-factor structure for both the full version (24 items) and the short version (8 items) of the CSEQ, demonstrating high reliability. Test information curves calculated using item response theory indicated high measurement precision for children and adolescents with low self-efficacy to those with average self-efficacy. The hypothesized constructs were generally supported, confirming the construct validity of the CSEQ. Hierarchical multiple regression analyses indicated that self-efficacy was more strongly related with depressive symptoms than anxiety symptoms. From the above, it has been confirmed that the CSEQ has sufficient reliability and validity to assess general self-efficacy in children and adolescents. Finally, based on the results of this study, the characteristics of general self-efficacy in children and adolescents were discussed.

本研究では、児童青年の一般的自己効力感を測定する尺度として、子ども用自己効力感尺度 (Children's Self-Efficacy Questionnaire: CSEQ) を開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。さらに、自己効力感、不安症状、抑うつ症状の関連を横断的に検討することを目的とした。本研究では小学4年生から高校1年生の合計1,059名が分析対象者となった。探索的および確認的因子分析の結果、CSEQ全項目版(24項目)と短縮版(8項目)は1因子構造が示され、高い信頼性が確認された。項目反応理論によるテスト情報曲線を算出し、自己効力感の低い者から平均的な者への測定精度が高いことが示された。事前に設定した仮説は概ね支持され、CSEQの構成概念妥当性が確認された。階層的重回帰分析の結果、自己効力感は不安症状よりも抑うつ症状と関連することが示された。以上のことから、CSEQは子どもの一般的自己効力感を測定する

1) 本研究は、国立研究開発法人科学技術振興機構の社会技術研究開発センターから助成を受けた (JPMJRX17A1, JPMJRX20IA)。

ための十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。最後に、本研究の結果に基づいて、児童青年の一般的自己効力感の特徴が議論された。

Key Words : Self-efficacy, anxiety, depression, reliability and validity, Children and adolescents

キーワード：自己効力感, 不安, 抑うつ, 信頼性と妥当性, 児童青年

問題と目的

社会的学習理論において、自己効力感とはある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという予期を示す (Bandura, 1977)。臨床心理学領域においては、自己効力感は短期的あるいは長期的な個人の行動を予測し、ネガティブな情動反応を抑制する要因であることが指摘されている (坂野・前田, 2002)。児童青年においても、自己効力感とは様々な精神症状や心理的変数との関連が報告されている。例えば、児童青年の自己効力感とは、不安症状や抑うつ症状との中程度の負の関連が報告されている (Muris, 2001; Muris, 2002; 福井ら, 2009)。その他にも、児童青年の内化化問題や外化化問題との中程度の負の関連、生活満足度や自尊感情との中程度の正の関連が示されている (福井ら, 2009; Suldo & Shaffer, 2007)。また、自己効力感が高まることで、精神的な回復力であるレジリエンスが高まることが指摘されている (平野, 2015)。さらに、児童青年の不安症状や抑うつ症状などの精神症状や精神的健康の向上を目的とした心理社会的介入においても、自己効力感が効果指標の1つとして使用されている (Dowling et al., 2019; Kishida et al., 2023; Oka et al., 2021)。

自己効力感の測定は、行動の水準 (level)、行動の強度 (strength)、行動の一般性 (generality) の3次元で捉える必要がある (坂野・前田, 2002)。行動の水準とは、ある行動を構成する容易なものから困難なものへの主観的や客観的な困難度を指す。行動の強度とは、そのような行動をどの程度確実に遂行できるかという確信の強さを指す。行動の一般性とは、ある特定の行動に対する自己効力感が、どの程度より一般的な場面や行動に般化するかという可能性を指す。例えば、不安なことに挑戦する行動を考えると、行動の水準は「知人に話しかける」から「大

勢の前で発表する」までの困難度の差を指し、行動の強度はそれらの行動を実行できるという確信の強さを示す。さらに、行動の一般性は、ある場面で不安に対処できたという自己効力感が、他の不安場面にも般化する程度を意味する。従来の臨床心理学領域では、課題特異的な自己効力感を測定することが多く、行動の水準や強度といった側面が強調されてきた。一方で、限られた状況における行動変容だけではなく、日常生活場面での行動の般化を目指した場合、行動の一般性が重要となる (坂野・東条, 1986; 坂野・前田, 2002)。以上を踏まえると、自己効力感を測定する際には、行動の困難度に幅がある複数の項目を用意する (行動の水準)、それらの強度が測定できるようなリッカート法を使用する (行動の強度)、特定の場面や課題に特異的にならないようにする (行動の一般性)、といった3点に留意する必要があると考えられる。

これまでに自己効力感を測定する様々な尺度が開発されている。海外で開発された代表的な尺度には、成人の自己効力感を測定する Generalized Self-Efficacy scale (GSE: Luszczynska et al., 2005) や、児童青年の自己効力感を測定する Self-Efficacy Questionnaire for Children (SEQ-C: Muris, 2001) がある。GSEは実効的自己効力感 (Action Self-efficacy) と対処的自己効力感 (Coping Self-efficacy) の2因子から構成される尺度であり、一般的自己効力感を測定していると考えられる。GSEは行動の水準、強度、一般性の3側面を踏まえて作成されている。一方で、SEQ-Cは行動の水準や強度の基準を満たすものの、学業などの課題特異的な自己効力感を含んで測定しており、行動の一般性の基準は満たしていない下位尺度が含まれる。これらの尺度は信頼性と妥当性が確認されているものの、日本語版は開発されていない。

本邦においても複数の尺度が開発されている。代

表的なものとしては、成人を対象とした一般性セルフ・エフィカシー尺度（Generalized Self-Efficacy Scale: GSES）（坂野・東条，1986；坂野ら，2006）や、児童青年を対象とした General Self-Efficacy Scale for Children-Revised（GSESC-R）がある（福井ら，2009）。GSES は、行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置づけ、といった3つの下位尺度から構成される一般的自己効力感を測定する尺度である。GSESC-R はチャレンジ精神と安心感という下位尺度から構成される一般的自己効力感を測定する尺度である。GSES や GSESC-R は行動の水準、強度、一般性の基準を満たす尺度である。しかし、GSES や GSESC-R には、「人と比べて心配性なほうである」といった反転項目からなる項目が含まれる。そのため、不安症状や抑うつ症状といった精神症状との弁別が難しく、介入による変化について、自己効力感が変容したのか、あるいは、不安症状や抑うつ症状が変容したのかについて検討することが難しいといった課題がある。その他の尺度としては、主に学業場面などを含んだ一般的自己効力感を測定する小中学生用セルフ・エフィカシー尺度（嶋田，1998）や、児童青年の対人領域における自己効力感を測定する対人的自己効力感尺度（松尾・新井，1998）が開発されている。小中学生用セルフ・エフィカシー尺度は学業場面に焦点が当たっており、行動の一般性の基準を一部満たしていない。一方で、対人的自己効力感尺度は、対人領域に特異的ではあるものの、比較的一般性の高い自己効力感を測定していると考えられる。各尺度は信頼性と妥当性を有することが確認されている。

以上のように、児童青年の自己効力感を測定するために、様々な尺度が開発されている。しかし、既存の尺度を児童青年の自己効力感に対する心理社会的介入の効果測定する尺度として用いる際にはいくつかの限界が指摘できる。第1に、児童青年の自己効力感を測定する尺度は、行動の水準（複数項目の使用）や行動の強度（リッカート法の使用）の基準を満たしているものの、行動の一般性の基準を満たしていない課題特異的な尺度や項目が存在するという点である。第2に、逆転項目を用いて測定される

自己効力感の項目は、不安症状や抑うつ症状との弁別が難しい可能性が指摘できる。そのため、逆転項目に関する課題を解決した上で、自己効力感および不安症状と抑うつ症状との関連を検討する必要がある。第3に、学業場面に関する項目は、心理社会的介入を実施した際の効果指標としては反応性が低い可能性がある（e.g., 「がんばって勉強すれば、せいせきは、よくなると思う（小学生用セルフ・エフィカシー尺度）」）。第4に、他者との比較により評価される項目は、介入によって変化しにくい可能性が指摘できる（e.g., 「友達よりもものごとをたくさん覚えることができる（GSESC-R）」）。例えば、自分と友だちが同様に変化している際には、自分自身の変化に気づきにくい可能性がある。第5に、具体性の高い項目は、幅広い年代の児童青年の自己効力感を測定しようとした際に、その場面が該当しない可能性がある（e.g., 「体育の授業で、2人組にならない時、だれかいっしょに組になろうとたのむ（対人的自己効力感尺度）」）。第6に、心理社会的介入では様々な側面をアセスメントする必要があり、項目数の多さが測定の心理的負担あるいは時間的負担となる可能性がある。複数の尺度を同時に測定することを考慮すると、信頼性と妥当性を確保した上で、10項目以下の短縮版を作成することが望ましい。

このような課題を受け、本研究では、児童青年の一般的自己効力感を測定する尺度として、子ども用自己効力感尺度（Children's Self-Efficacy Questionnaire: CSEQ）を開発し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。さらに、自己効力感、不安症状、抑うつ症状の関連を横断的に検討することを目的とした。CSEQ は、(a) 行動の水準（困難度の低い項目から高い項目を用意する）、(b) 行動の強度（リッカート法で回答できる）、(c) 行動の一般性（課題特異的な項目としない）、(d) 他者との非比較、(e) 反転項目の不使用（不安症状や抑うつ症状との弁別のため）、(f) 幅広い年齢層への適用（小学生から高校生が回答できる）、(g) 心理社会的介入への反応性、(h) 短縮版の用意、という8点を踏まえて作成を行った。(a)、(b)、(c) は自己効力感の測定、(d)、(e)、(f)、(g) は先行研究の課題、(h)

は回答者の負担軽減を考慮して設定した。

なお、CSEQの構成概念妥当性の検討には、先行研究の知見や指摘（平野，2015; Muris, 2001; Muris, 2002; 福井ら，2009; Suldo & Shaffer, 2007）に基づいて、以下の仮説を設定した。不安症状と弱いから中程度の負の相関、抑うつ症状と中程度の負の相関、レジリエンスと中程度の正の相関、怒り感情と無相関から弱い負の相関、総合的困難さ、内在化問題、外在化問題と中程度の正の相関、生活満足度と中程度の負の相関があると予想した。なお、不安症状との仮説は、CSEQでは逆転項目を採用していないことから、自己効力感との関連が他の変数と比較的に弱いと予想した。また、怒り感情との仮説は、行動や認知を含まない感情のみの変数（武部ら，2018）であることから、無相関から弱い負の相関と予想した。

方法

CSEQの予備項目の作成

自己効力感を測定する先行研究や文献（福井ら，2009; Luszczynska et al., 2005; 坂野ら，2006; 坂野・前田，2002）を参考にして、CSEQの予備項目の作成を行った。博士号を有する臨床児童心理学を専門とする研究者3名で検討を行った結果、GSESの「行動の積極性（e.g., どんなことでも積極的にこなすほうである）」、GSESC-Rの「チャレンジ精神（e.g., どんなことでも、どんどん自分から挑戦していく）」、GSEの「実行的自己効力感（e.g., 必要な努力さえ惜しまなければ、私はだいたいの問題を解決することができる）」や「対処的自己効力感（e.g., どのようなことが起ころうとも、私はいつもその事に対処することができる）」に含まれる項目が本研究で測定する一般的自己効力感に類似の概念であることが協議された。以上の尺度に含まれる項目を精査し、再分類を行った結果、児童青年の自己効力感には「積極的な行動に対する自己効力感（e.g. ものごとを自分から進んでやることができる）」「挑戦する行動に対する自己効力感（e.g. いろいろなことにちょうせんすることができる）」「問題を解決する行動に対する自己効力感（e.g. いろいろな問題をかいけつする

ことができると思う）」「努力を継続する行動に対する自己効力感（e.g. 自分の好きなことのために、努力を続けることができる）」の4要素に分類されることが協議された。これらの4要素は、課題特異的な自己効力感ではなく一般性の高い自己効力感であると判断された。なお、これらの4要素は実証的データやすでに提唱されている分類ではなく、本研究独自の分類である。以上を踏まえて、積極的行動、挑戦的行動、問題解決行動、努力継続行動といった各要素6項目の合計24項目の予備項目を作成した。各項目の作成では、(a) 行動の水準、(b) 行動の強度、(c) 行動の一般性、(d) 他者との非比較、(e) 反転項目の不使用、(f) 幅広い年齢層への適用、(g) 心理社会的介入への反応性、といった点を考慮した。なお、対人関係に関する項目は独立した要素ではないものの、児童青年期において重要な役割を果たす内容であることから4要素に含む形で項目を追加した（「まわりの人と、仲良くすることができる（積極的行動）」「いろいろな人に対して、自分の意見を言うことができる（挑戦的行動）」「まわりの人とけんかしても、仲直りすることができる（問題解決行動）」「周りの人と仲良くなるために、努力をすることができる（努力継続行動）」）。

調査対象者

学校長から研究参加の同意を得られた学校が本調査に参加した。小学4・6年生434名、中学1・3年生899名、高校1年生232名の合計1,565名が本調査に参加した。

倫理的配慮

本研究は、第1著者が研究実施時に所属した大学の「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会による承認を得て実施された（承認番号23007号）。インフォームド・コンセントは学校長に対して口頭と書面にて説明し、書面にて同意を得た。保護者に対しては、書面を用いて、学校での教育活動の一端として調査が実施されること、個人が特定されるデータは取得しないこと、保護者や児童生徒が調査の参加を拒否できること、発表前までは当該データの取り下げができること、といった点が伝えられた。

児童生徒に対して、担任教師より口頭と書面を用いて、回答は成績と無関係であること、自らの考えを回答すること、無回答が可能であること、が伝えられた。

調査材料

小学生は a, b, c, d, f に回答を求め、中高生は a, b, c, d, e, g, h に回答を求めた。CSEQ の予備項目を除いて、各尺度は先行研究において信頼性と妥当性が確認されている。本研究で使用した尺度については、すべての尺度を学校長に提示した上で、項目数の多さや項目内容に関する学校の希望に応じて使用する尺度を選定した。そのため、小学生と中高生において測定尺度が異なっている。ただし、本研究の目的を説明し、自己効力感、不安症状、抑うつ症状についてはすべての対象者に回答を依頼した。

a) フェイスシート

対象者の年齢、学年、性別について回答を求めた。

b) 子ども用自己効力感尺度（CSEQ）予備項目

CSEQ の予備項目として作成した 24 項目を用いた。CSEQ の教示文は「下に書かれていることが、今のあなたにどのくらいあてはまりますか」とした。各項目には 4 件法で回答した（「ぜんあてはまらない（0 点）」「あまりあてはまらない（1 点）」「すこしあてはまる（2 点）」「とてもあてはまる（3 点）」）。

c) 短縮版児童用不安尺度（石川ら、2018）

不安症状を測定する 8 項目の自己記入式尺度である。合計得点を不安症状として用いた。内的一貫性は .83 であった。

d) 児童用抑うつ評価尺度短縮版（並川ら、2011）

抑うつ症状を測定する 9 項目の自己記入式尺度である。当該尺度は抑うつ気分と興味喜びの減退という下位尺度から構成される。合計得点を抑うつ症状として用いた。内的一貫性は .76 であった。

e) 子ども用怒り感情尺度（武部ら、2018）

怒り感情を測定する 7 項目の自己記入式尺度である。合計得点を怒り感情として用いた。内的一貫性は .94 であった。

f) 児童用レジリエンス尺度（池田・長田、2018）

レジリエンスを構成する 4 つの下位尺度（セルフコントロール、遂行性、ソーシャルサポート、楽観的・

肯定的思考）からなる 30 項目の自己記入式尺度である。本研究では、下位尺度の合計得点をレジリエンス得点として用いた。内的一貫性は .94 であった。

g) 子どもの強みと困難さアンケート（原田ら、2014）

情緒の問題、仲間関係の問題、行為の問題、多動/不注意、向社会的な行動、という下位尺度からなる 25 項目の自己記入式尺度である。本研究では、内在化問題（情緒の問題と仲間関係の問題の合計）、外在化問題（行為の問題と多動/不注意の合計）、総合的困難さ（内在化問題と外在化問題の合計）の 3 つの指標を用いた。内的一貫性は、総合的困難さは .73、内在化問題は .63、外在化問題は .64 であった。

h) 児童用生活満足度（吉武、2010）

生活満足度を測定する 7 項目の自己記入式尺度である。合計得点を生活満足度として用いた。内的一貫性は .81 であった。

統計解析

CSEQ の因子構造を検討するために、最尤法プロマックス回転を用いた探索的因子分析を実施した。次に、段階反応モデルを用いた項目反応理論を用いて、各項目の困難度と識別力を算出した。(a) 識別力が高い項目、(b) 困難度が多様な項目、(c) 項目内容が多様な項目、(d) 天井効果や床効果がない項目、(e) 計 10 項目以下、という 5 つの基準に基づいて、CSEQ の短縮版を作成した。CSEQ の全項目版と短縮版に対して、調整済み重み付き最小二乗法を用いた確認的因子分析を実施し、内的一貫性を算出した。

次に、項目反応理論を用いて、テスト情報曲線を作成した。続いて、性別（男子、女子）と発達段階（小学生、中高生）を要因とする 2 要因分散分析を実施した。CSEQ の構成概念妥当性を検討するために、各変数との相関係数を算出して仮説の検証を行った（不安症状と弱いから中程度の負の相関、抑うつ症状と中程度の負の相関、レジリエンスと中程度の正の相関、怒り感情と無相関から弱い負の相関、総合的困難さ、内在化問題、外在化問題と中程度の正の相関、生活満足度と中程度の負の相関）。

最後に、自己効力感、不安症状、抑うつ症状の関連を横断的に検討するために、階層的重回帰分析を

実施した。不安症状または抑うつ症状を従属変数として、ステップ1に性別と発達段階、ステップ2に一方の症状、ステップ3に自己効力感（全項目版・短縮版）を説明変数として投入した（強制投入法）。ステップ3の増分妥当性が有意であり、ステップ3に弱い以上の関連がある場合、自己効力感から不安症状または抑うつ症状に関連があると判断した。統計解析にはSPSS Statics 29とR version 4.3.1(lavaan, ltm)を用いた。

結果

分析対象者

回答に不備のあった者を除外し、小学4年生から6年生299名、中学1年生から3年生561名、高校1年生199名の合計1,059名が分析対象者となった(有効回答率67.67%)。本研究では小学4年生から6年生を児童(299名)、中学1年生から高校1年生を青年(760名)とした。性別の割合は、男子が54.7%(569

名)であり、女子が46.3%(490名)名、その他0%(0名)であった。全体の平均年齢は12.51 ± 1.74歳であった。

構造的妥当性、項目反応理論、信頼性

CSEQの予備項目である24項目について探索的因子分析を実施した。固有値の減衰状況は12.45, 1.27, 1.07, 0.92, 0.72, であり、スクリープロットより1因子構造が示唆された。以上を踏まえて、CSEQは1因子構造を採用した。因子負荷量を検討した結果、すべての項目が.50以上であり、24項目を全項目版として採用した。探索的因子分析の結果をTable 1に示す。

続いて、全項目版の各項目について識別力と困難度を算出し、短縮版の項目の選定を行った(Table 1)。(a) 識別力, (b) 困難度, (c) 項目内容, (d) 天井効果や床効果, (e) 10項目以下, という基準を踏まえて、CSEQ短縮版として8項目を選定した。当該の8項目は、事前に準備した4要素から2項目

Table 1. 探索的因子分析および項目反応理論の結果 (N = 1,059)

No	分類	項目	因子 負荷量	M	SD	識別力	困難度		
							b1	b2	b3
16	努力継続行動	難しいことでも、少しずつがんばることができると思う	0.84	1.95	0.81	3.48	-1.92	-0.72	0.77
19	挑戦的行動	いろいろなことに挑戦することができる	0.82	1.99	0.85	3.02	-1.95	-0.72	0.63
8	努力継続行動	もし失敗しても、一生懸命がんばることができる	0.80	1.95	0.86	2.71	-1.93	-0.71	0.70
24	努力継続行動	苦手なことでも、あきらめずに努力することができる	0.80	1.92	0.86	2.60	-1.93	-0.66	0.75
21	積極的行動	ものごとを自分から進んでやることができる	0.78	1.91	0.82	2.62	-2.09	-0.65	0.87
11	挑戦的行動	難しいことでも、まずは挑戦してみたいと思う	0.78	1.93	0.88	2.65	-1.81	-0.65	0.71
12	努力継続行動	うまくできなくても、コツコツと努力することができる	0.78	1.94	0.86	2.48	-2.03	-0.66	0.73
17	積極的行動	自分で決めたことは、自信をもってやってみることができる	0.77	2.00	0.81	2.60	-2.22	-0.82	0.70
22	問題解決行動	もし失敗しても、次の方法をためてみる可以尝试	0.76	1.94	0.82	2.39	-2.16	-0.73	0.83
7	挑戦的行動	苦手なことでも、少しずつチャレンジすることができる	0.76	1.84	0.83	2.39	-1.96	-0.63	1.01
3	挑戦的行動	新しいことにどんどんチャレンジしてみたい	0.74	2.11	0.87	2.20	-2.12	-0.97	0.38
18	問題解決行動	こまったときでも、いろいろな方法をやってみることができる	0.74	1.94	0.80	2.24	-2.35	-0.77	0.88
6	問題解決行動	いろいろな問題をかいつくすることができると思う	0.70	1.78	0.81	2.03	-2.10	-0.56	1.25
9	積極的行動	自分にできることは、すぐにやってみる	0.70	2.08	0.84	1.92	-2.50	-0.93	0.53
1	積極的行動	いろいろなことをうまくできる自信がある	0.67	1.53	0.88	1.76	-1.62	-0.10	1.66
20	努力継続行動	まわりの人と仲良くなるために、努力することができる	0.67	2.22	0.80	1.82	-2.61	-1.35	0.30
15	挑戦的行動	いろいろな人に対して、自分の意見を言うことができる	0.66	1.83	0.89	1.69	-2.16	-0.54	1.00
14	問題解決行動	難しい場面でも、落ち着いて行動することができると思う	0.61	1.81	0.78	1.51	-2.70	-0.66	1.43
4	努力継続行動	自分の好きなことのために、努力を続けることができる	0.61	2.33	0.76	1.52	-3.18	-1.69	0.10
2	問題解決行動	自分でかいつくできることがあると思う	0.59	1.94	0.79	1.41	-2.69	-1.10	1.20
5	積極的行動	まわりの人と、仲良くすることができる	0.59	2.39	0.74	1.46	-3.52	-1.89	-0.08
10	問題解決行動	まわりの人とけんかしても、仲直りすることができる	0.56	2.29	0.78	1.33	-3.33	-1.74	0.17
23	挑戦的行動	自分の好きなことのために、がんばりたいと思う	0.55	2.61	0.64	1.42	-3.87	-2.48	-0.70
13	積極的行動	楽しいと思うことは、すぐはじめることができる	0.50	2.57	0.66	1.14	-4.27	-2.83	-0.62

注) 太字は短縮版の項目を示す。

ずつを抽出した。次に、CSEQ 全項目版（24 項目）と短縮版（8 項目）に対して、1 因子構造を想定した確認的因子分析を実施した。その結果、十分な適合指標が示され、1 因子構造の妥当性が支持された（Table 2）。確認的因子分析における全項目版の因子負荷量は 0.57 から 0.83 であり、短縮版の因子負荷量は .66 から .82 であった。内的一貫性は、全項目版は .96 であり、短縮版は .90 であった。このことから、CSEQ の全項目版と短縮版は高い信頼性と有することが示された。

次に、項目反応理論を用いて、CSEQ の全項目版と短縮版のテスト情報曲線を作成した（Figure 1）。その結果、曲線の形状より、CSEQ は全項目版と短縮版の両方において、自己効力感が非常に高い者（潜在特性値が 2 以上）に対しては測定精度が低下するものの、自己効力感の平均的な者から自己効力感の低い者に至るまでの幅広い対象者について測定精度が高いことが示された。

Table 2. 確認的因子分析による適合度指標 (N = 1,059)

	χ^2	df	GFI	AGFI	CFI	NFI	RMR	RMSEA (90%CI)
全項目版	442.046 ***	252	0.994	0.992	0.996	0.992	0.029	0.027 (0.023 to 0.031)
短縮版	34.816 *	20	0.997	0.995	0.998	0.995	0.024	0.026 (0.010 to 0.041)

注) *** $p < .001$, * $p < .05$.

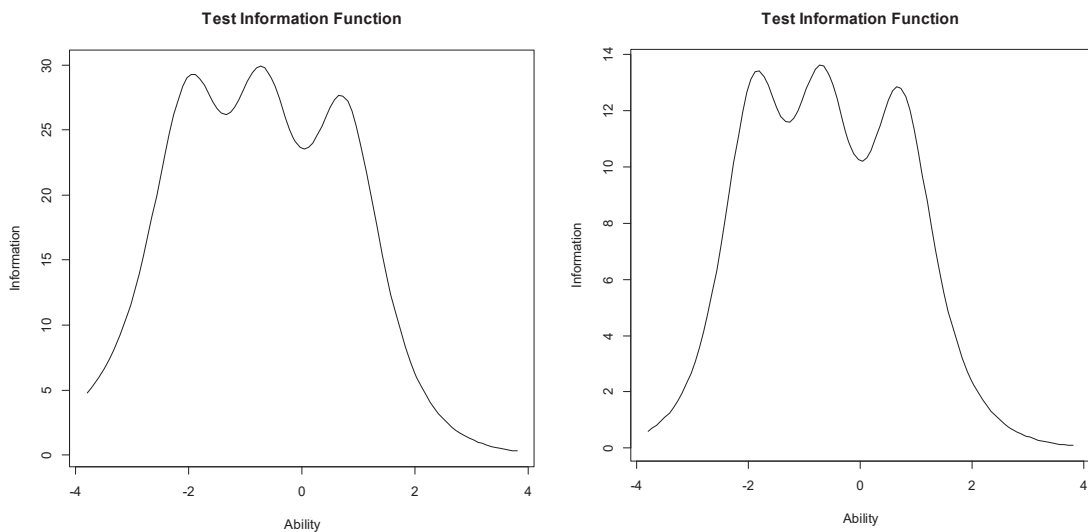


Figure 1 テスト情報曲線（左図は全項目版，右図は短縮版）

Table 3. 各変数の記述統計と分散分析の結果 (N = 1,059)

(範囲)		全体			児童 (小学生)			青年 (中高生)			主効果		交互作用
		全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	性別	発達段階	
	n	1059	569	490	299	176	123	760	393	367	F	F	F
全項目版 (0-72)	M	48.79	49.30	48.20	51.90	52.96	50.38	47.57	47.66	47.47	2.08	18.40 ***	1.57
	SD	13.99	14.51	13.36	14.11	14.55	13.36	13.77	14.20	13.30		C > A	
短縮版 (0-24)	M	15.01	15.23	14.75	16.39	16.81	15.79	14.47	14.52	14.40	2.70	26.64 ***	1.59
	SD	5.22	5.45	4.93	5.08	5.34	4.65	5.17	5.36	4.97		C > A	

注) *** $p < .001$, C = Children (児童), A = Adolescents (青年), G = Girls (女子), B = Boys (男子).

尺度得点と二要因分散分析

全項目版と短縮版の平均得点（標準偏差）を算出した結果、48.79（13.99）点と14.73（5.19）点という結果が得られた。二要因分散分析の結果、全項目版は性別や交互作用に有意な結果が示されなかったものの、発達段階に主効果が示され（ $F(1, 1055) = 18.40, p < .001$ ）、児童が青年よりも有意に高いことが示された。短縮版についても、性別や交互作用に有意な結果が示されなかったものの、発達段階に主効果が示され（ $F(1, 1055) = 26.64, p < .001$ ）、児童が青年よりも有意に高いことが示された。尺度得点と二要因分散分析の結果を Table 3 に示す。

仮説検証（構成概念妥当性）

CSEQ の構成概念妥当性を検討するために、全体、児童、青年における各変数の相関係数を算出した（Table 4）。自己効力感、不安症状、抑うつ症状は児童と青年の両方で測定しており、児童青年全体での分析を行った。

全対象者の相関分析の結果、CSEQ 全項目版と短縮版は非常に強い正の相関が示された（ $r = .96, p < .001$ ）。次に、全項目版と短縮版は不安症状と弱い負の相関が示された（ $r = -.23, p < .001$; $r = -.24, p < .001$ ）。抑うつ症状とはいずれも中程度から強い負の相関が示された（ $r = -.60, p < .001$; $r = -.59, p < .001$ ）。なお、抑うつ症状の下位尺度である抑うつ気分とは弱い負の相関（ $r = -.25, p < .001$; $r = -.26, p < .001$ ）、興味喜びの減退とは強い負の相関が示された（ $r = -.65, p < .001$; $r = -.63, p < .001$ ）。次に、児童の相関分析の結果、全項目版と短縮版およびレジリエンスは、非常に強い正の相関が示された（ $r = .88, p < .001$; $r = .85, p < .001$ ）。青年の相関分析の結果、怒り感情とは非常に弱い負の相関が示された（ $r = -.17, p < .001$; $r = -.14, p < .001$ ）。総合的困難さ、内在化問題、外在化問題とは、弱いから中程度の正の相関が示された（ $-.35 < r < -.44$, すべて $p < .001$ ）。最後に、生活満足とは中程度の正の相関が示された（ $r = .51, p < .001$; $r = .49, p < .001$ ）。以上のことから、

Table 4. 各変数の相関係数（ $N = 1,059$ ）

	自己効力感		不安 症状	抑うつ 症状	怒り 感情	総合的 困難さ	内在化 問題	外在化 問題
	全項目版	短縮版						
全体 ($N = 1,059$)								
短縮版	.96 ***	—						
不安症状	-.23 ***	-.24 ***	—					
抑うつ症状	-.60 ***	-.59 ***	.52 ***	—				
児童 ($n = 299$)								
短縮版	.97 ***	—						
不安症状	-.14 *	-.16 **	—					
抑うつ症状	-.56 ***	-.55 ***	.56 ***	—				
レジリエンス	.88 ***	.85 ***	-.09	-.49 ***				
青年 ($n = 760$)								
短縮版	.95 ***	—						
不安症状	-.28 ***	-.30 ***	—					
抑うつ症状	-.61 ***	-.59 ***	.51 ***	—				
怒り感情	-.17 ***	-.14 ***	.39 ***	.34 ***	—			
総合的困難さ	-.43 ***	-.44 ***	.52 ***	.53 ***	.38 ***	—		
内在化問題	-.35 ***	-.37 ***	.65 ***	.57 ***	.36 ***	.84 ***	—	
外在化問題	-.37 ***	-.35 ***	.19 ***	.30 ***	.26 ***	.82 ***	.38 ***	—
生活満足度	.51 ***	.49 ***	-.43 ***	-.63 ***	-.30 ***	-.49 ***	-.48 ***	.32 ***

注) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.

概ね事前に設定した仮説が支持され、CSEQの全項目版と短縮版の構成概念妥当性が支持された。

考察

不安症状と抑うつ症状への関連

自己効力感、不安症状、抑うつ症状の関連を検討するために、階層的重回帰分析を行った。不安症状は、性別、発達段階、および、抑うつ症状を統制した上で、自己効力感（全項目または短縮版）を投入することの増分妥当性が示され（ $\Delta R^2 = 0.01, p < .001$; $\Delta R^2 = 0.01, p = .006$ ）、有意ではあるものの非常に弱い正の関連が示された（ $\beta = .11, p < .001$; $\beta = .09, p = .006$ ）。一方で、抑うつ症状は、性別、発達段階、および、不安症状を統制した上で、自己効力感（全項目または短縮版）を投入することの増分妥当性が示され（ $\Delta R^2 = 0.23, p < .001$; $\Delta R^2 = 0.22, p < .001$ ）、中程度の負の関連が示された（ $\beta = -.50, p < .001$; $\beta = -.49, p < .001$ ）。階層的重回帰分析の結果を Table 5 に示す。

本研究では、児童青年の一般的自己効力感を測定する尺度として、子ども用自己効力感尺度（CSEQ）を開発し、信頼性と妥当性の検討を目的とした。さらに、自己効力感、不安症状、抑うつ症状の関連を横断的に検討することを目的とした。探索的および確認的因子分析の結果、CSEQ全項目版（24項目）と短縮版（8項目）は1因子構造が示され、高い信頼性が示された。加えて、CSEQは自己効力感の平均的な者から自己効力感の低い者に至るまでの幅広い対象者に対して測定精度が高いことが示唆された。事前に設定した仮説は概ね支持され、全項目版と短縮版の構成概念妥当性が支持された。最後に、階層的重回帰分析の結果、自己効力感は不安症状よりも抑うつ症状に関連することが示唆された。以上のことから、CSEQは十分な信頼性と妥当性を有する尺度であることが確認された。

Table 5. 階層的重回帰分析の結果（N = 1,059）

		β			β
子ども用自己効力感尺度（全項目版）					
不安症状の予測		抑うつ症状の予測			
Step 1		Step 1			
性別	0.19 ***	性別	-0.05 *		
発達段階	-0.04	発達段階	0.02		
Step 2		Step 2			
抑うつ症状	0.58 ***	不安症状	0.41 ***		
Step 3		Step 3			
自己効力感	0.11 ***	自己効力感	-0.50 ***		
R^2		0.31 ***	0.51 ***		
ΔR^2		0.01 ***	0.23 ***		
子ども用自己効力感尺度（短縮版）					
不安症状の予測		抑うつ症状の予測			
Step 1		Step 1			
性別	0.19 ***	性別	-0.05 *		
発達段階	-0.04	発達段階	0.01		
Step 2		Step 2			
抑うつ症状	0.56 ***	不安症状	0.41 ***		
Step 3		Step 3			
自己効力感	0.09 *	自己効力感	-0.49 ***		
R^2		0.31 ***	0.50 ***		
ΔR^2		0.01 *	0.22 ***		

注) *** $p < 0.001$, * $p < 0.05$, 性別 (0 = 男子, 1 = 女子), 発達段階 (0 = 児童, 1 = 青年)

本邦の一般性自己効力感を測定する先行研究では、成人用の GSES は 3 因子構造（行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置づけ）であり（坂野ら, 2006）、児童青年用の GSESC-R は 2 因子構造（チャレンジ精神, 安心感）が示されている（福井ら, 2009）。一方、本研究で開発した CSEQ は 1 因子構造が示された。この結果は、作成過程において逆転項目や他者との比較の項目を含んでいないことが影響していると考えられる。また、CSEQ では想定した 4 要素に基づく因子構造は示されなかったものの、努力継続行動に分類される項目の負荷量や識別力が高いことが示された（e.g., 「難しいことでも、少しずつがんばることができると思う」「もし失敗しても、一生懸命がんばることができる」）。このことから、努力継続行動に対する自己効力感、児童青年における一般的自己効力感の高低を判別する際の指標となる可能性がある。

自己効力感の性別や発達段階による差異は先行研究で検討されている。例えば、Muris et al. (2001) では青年の自己効力感、男子の方が女子よりも高いことが示されているものの、Habibi et al. (2014) では反対に女子の方が男子よりも高いことが示されている。発達段階については、Habibi et al. (2014) は青年では、14-15 歳、16-17 歳、18-19 歳の比較において、年齢差がないことを報告している。本邦では、児童と青年を別々に検討した結果、一般的自己効力感、性別や学年においてそれぞれ差がないことが報告されている（嶋田, 1998）。一方、本研究では、性別における明確な差異はなかったものの、青年の方が児童よりも自己効力感が低いこと示された。一般的自己効力感において、発達段階によって差異が生じる可能性があることは、心理社会的介入を実施して、その有効性を児童から青年にかけて追跡する際には特に考慮すべき点である。

自己効力感と各変数間の相関関係は、先行研究（福井ら, 2009; Muris, 2001; Suldo & Shaffer, 2007）に基づいて設定した仮説を概ね支持する結果が得られ、CSEQ の構成概念妥当性が確認された。抑うつ症状には中程度の負の関連が確認されたものの、抑うつ気分（抑うつ症状の下位尺度）、不安症状、怒り感情との相関はそれほど明確な関連が示されな

かった。このことから、一般的自己効力感、精神症状におけるネガティブな感情と関連はあるものの、その関連は弱い可能性が示された。先行研究では、自己効力感と不安症状や抑うつ症状に中程度の負の相関が確認されているものの（福井ら, 2009）、反転項を用いていることから各症状との弁別に課題があった。本研究の結果は、反転項目を削除した CSEQ と各症状の弁別的妥当性を支持する結果である。

次に、総合的困難さ、内在化問題、外在化問題との関連については、弱いから中程度の負の関連が示された。SDQ によって測定されるこれらの構成概念は、多様な精神症状に関連する困難さを含む概念である。そのため、一般的自己効力感を測定する CSEQ との関連が見られたことは、行動の一般性の基準に関する構成概念妥当性を支持する結果であると考えられる。レジリエンスとの関連については予想以上に強い正の相関係数が示された。この結果は、本研究で使用したレジリエンス尺度の特徴が影響したことが考えられる。レジリエンスの構成要因は、環境要因と個人要因に大別され（平野, 2015）、自己効力感、個人要因に含まれる。本研究で使用したレジリエンス尺度においても、個人要因であるセルフコントロール（e.g., 決めたら必ず実行する）や遂行性（e.g., 私には、自分の目標を達成する力があると思う）に関する項目が多く含まれていた（池田・長田, 2018）。そのため、本研究における自己効力感とレジリエンスが類似の構成概念を測定しており、相関関係が予想よりも高くなった可能性が指摘できる。

階層的重回帰分析の結果、自己効力感、不安症状よりも抑うつ症状との関連が強いことが示唆された。CSEQ と類似の概念を測定している GSESC-R のチャレンジ精神は、不安症状や抑うつ症状の抑うつ気分との関連が弱く、抑うつ症状の興味喜びの減退との関連が強いと報告されている（福井ら, 2009）。一方、領域特異的な自己効力感を測定する SEQ-C を用いて、中高生を対象とした横断的な調査では、学業的自己効力感、抑うつ症状、感情的自己効力感、不安症状と関連が強いことが示されている（Muris, 2002）。さらに、SEQ-C を用いた高校生に対

する8か月の縦断的調査では、学業的自己効力感は、不安症状や抑うつ症状ではなく、ストレス症状を予測することが示されている（Wuthrich et al., 2021）。以上のことから、領域特異的な自己効力感は不安症状、抑うつ症状、ストレス症状にそれぞれ異なる関連する可能性があるものの、一般的な自己効力感はや抑うつ症状の興味喜びの減退に対して特異的に関連する可能性がある。

以上を踏まえて、CSEQによって測定される一般的な自己効力感の特徴を以下のようにまとめることができる。第1に、一般的自己効力感は、積極的行動、挑戦的行動、問題解決行動、努力継続行動の4要素に対する自己効力感を含む1因子構造が抽出された。その中でも、努力継続に関する項目は負荷量・識別力が相対的に高く、一般的自己効力感の主要側面の一つである可能性が示唆された。第2に、一般的自己効力感は、横断的踏査による限界はあるものの、児童から青年への発達段階の移行に伴って減少する可能性が示された。第3に、一般的自己効力感は、不安症状、抑うつ気分、怒り感情といったネガティブな感情の過剰さではなく、抑うつ症所における興味喜びの減退といったポジティブな感情の不足により関連する可能性がある。第4に、一般的自己効力感には総合的困難さ、内在化問題、外在化問題といった全般的な精神症状やネガティブな側面に留まらず、生活満足度やレジリエンスといったポジティブな側面にも関連する可能性がある。

最後に、本研究の課題と限界を述べる。第1に、CSEQの信頼性として、再検査信頼性や測定誤差が未検討であるという限界がある。第2に、構成概念妥当性として、既存の自己効力感の測定尺度との関連が未検討であるという課題がある。第3に、本研究は横断的な研究であり、自己効力感と各変数との因果関係までは言及できないという限界がある。第4に、本研究では健常群を対象としており、臨床群や準臨床群に対するCSEQの尺度特性についても今後検討する必要がある。第5に、心理社会的介入によるCSEQの反応性が未検討であるという課題がある。以上のような課題や限界はあるものの、CSEQは十分な信頼性と妥当性を有することが確認された。今後は、CSEQを用いて、児童青年のメンタル

ヘルス問題の改善を目指した心理社会的介入における自己効力感の変化について、介入研究に基づく実証的検証を重ねる必要がある。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-Efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- Dowling, K., Simpkin, A. J., & Barry, M. M. (2019). A cluster randomized-controlled trial of the MindOut social and emotional learning program for disadvantaged post-primary school students. *Journal of Youth and Adolescence*, 48 (7), 1245-1263.
- Habibi, M., Tahmasian, K., & Ferrer-Wreder, L. (2014). Self-efficacy in Persian adolescents: Psychometric properties of a Persian version of the Self-Efficacy Questionnaire for Children (SEQ-C). *International Perspectives in Psychology*, 3 (2), 93-105.
- 原田新・伊藤大幸・望月直人・田中善大・大嶽さと子・高柳伸哉・中島俊思・野田航・柴木史緒・辻井正次 (2014). 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの構成概念的妥当性—抑うつ、攻撃性、親評定フォームとの関連から—。小児の精神と神経。小児の神経と精神, 53 (4), 343-351.
- 平野真理 (2015). レジリエンスは身につけられるのか—個人差に応じた心のサポートのために—。東京大学出版。
- 池田とも子・長田佳子 (2018). 児童用レジリエンス尺度の作成及びストレス反応と抑うつとの関連。宮崎大学教育文化学部卒業論文。
- 石川信一・石井僚・福住紀明・村山航・大谷和夫・榊美知子・鈴木高志・田中あゆみ (2018). 短縮版児童用不安尺度 (Short CAS) 日本語版作成の試み—青年を対象とした信頼性と妥当性の検討—。不安症研究, 10 (1), 64-73.
- 福井至・飯島政範・小山繭子・中山ひとみ・小松智賀・小田美穂子・嶋田洋徳・坂野雄二 (2009). 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度 GSESC-R (General Self-Efficacy Scale for Children-Revised)。こころネット。
- Kishida, K., Hida, N., Matsubara, K., Oguni, M., & Ishikawa, S. I. (2023). Implementation of a transdiagnostic universal prevention program on anxiety in junior high school students after school closure during the COVID-19 pandemic. *Journal of Prevention*, 44 (1), 69-84.
- Luszczynska, A., Scholz, U., & Schwarzer, R. (2005). The general self-efficacy scale: multicultural validation studies. *Journal of Psychology*, 139 (5), 439-457.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的

- 自己意識, 対人的自己効力感との関係. 教育心理学研究, 46 (1), 21-30.
- Muris, P. (2001). A brief questionnaire for measuring self-efficacy in youths. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 23 (3), 145-149.
- Muris, P. (2002). Relationships between self-efficacy and symptoms of anxiety disorders and depression in a normal adolescent sample. *Personality and Individual Differences*, 32 (2), 337-348.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之・辻井正次 (2011). 研究と報告 Birleson 自己記入式抑うつ評価尺度 (DSRS-C) 短縮版の作成. 精神医学, 53 (5), 489-496.
- Oka, T., Ishikawa, S. I., Saito, A., Maruo, K., Stickley, A., Watanabe, N., ... & Kamio, Y. (2021). Changes in self-efficacy in Japanese school-age children with and without high autistic traits after the Universal Unified Prevention Program: a single-group pilot study. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 15 (1), 42.
- 坂野雄二・前田基成 (2002). セルフ・エフィカシーの臨床心理学. 北大路書房.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12 (1), 73-82.
- 坂野雄二・東條光彦・福井至・小松智賀 (2006). 一般性セルフ・エフィカシー尺度 GSES (General Self-Efficacy Scale). ころろネット.
- 嶋田洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究. 風間書房.
- Suldo, S. M., & Shaffer, E. J. (2007). Evaluation of the self-efficacy questionnaire for children in two samples of American adolescents. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 25 (4), 341-355.
- 武部匡也・岸田広平・佐藤美幸・高橋史・佐藤寛 (2017). 子ども用怒り感情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 行動療法研究, 43 (3), 169-179.
- 吉武尚美 (2010). 中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベントーイベントの項目収集と相互影響関係の検討一. 教育心理学研究, 58 (2), 140-150.
- Wuthrich, V. M., Belcher, J., Kilby, C., Jagiello, T., & Lowe, C. (2021). Tracking stress, depression, and anxiety across the final year of secondary school: A longitudinal study. *Journal of School Psychology*, 88, 18-30.

(2025. 1. 20 受稿) (2026. 3. 26 受理)

(ホームページ掲載 2026年4月)

付録（子ども用自己効力感尺度）

下に書かれていることが、今のあなたにどのくらいあてはまりますか。それぞれのしつもんについて、ぜんぜんあてはまらないときには、0を、あまりあてはまらないときには、1を、すこしあてはまるときには、2を、とてもあてはまるときには、3をそれぞれ○でかこんでください。

	ぜんぜんあてはまらない	あまりあてはまらない	すこしあてはまる	とてもあてはまる
1. いろいろなことをうまくできる自信がある※	0	1	2	3
2. 自分でかいけつできることがあると思う※	0	1	2	3
3. 新しいことにどんどんチャレンジしてみたい※	0	1	2	3
4. 自分の好きなことのために、努力を続けることができる	0	1	2	3
5. まわりの人と、仲良くすることができる	0	1	2	3
6. いろいろな問題をかいけつすることができると思う※	0	1	2	3
7. 苦手なことでも、少しずつチャレンジすることができる※	0	1	2	3
8. もし失敗しても、一生けんめいがんばることができる※	0	1	2	3
9. 自分にできることは、すぐにやってみる	0	1	2	3
10. まわりの人とけんかしても、仲直りすることができる	0	1	2	3
11. 難しいことでも、まずはちょうせんしてみたいと思う	0	1	2	3
12. うまくできなくても、コツコツと努力することができる	0	1	2	3
13. 楽しいと思うことは、すぐはじめることができる	0	1	2	3
14. 難しい場面でも、落ち着いて行動することができると思う	0	1	2	3
15. いろいろな人に対して、自分の意見を言うことができる	0	1	2	3
16. 難しいことでも、少しずつがんばることができると思う※	0	1	2	3
17. 自分で決めたことは、自信をもってやってみることができる	0	1	2	3
18. こまったときでも、いろいろな方法をやってみることができる	0	1	2	3
19. いろいろなことにちょうせんすることができる	0	1	2	3
20. まわりの人と仲良くなるために、努力することができる	0	1	2	3
21. ものごとを自分から進んでやることができる※	0	1	2	3
22. もし失敗しても、次の方法をためしてみるることができる	0	1	2	3
23. 自分の好きなことのために、がんばりたいと思う	0	1	2	3
24. 苦手なことでも、あきらめずに努力することができる	0	1	2	3

※短縮版（8項目）